長岡工業高等専門学校研究紀要　第45巻　第２号（2009）

論　　文

ビアトリス・ポッターの社会学的経済学の歴史的方法
―生理学的方法から進化論的方法へ―

佐藤公俊[1]

[1] 一般教育科―社会科（Liberal Arts-Social Sciences, Nagaoka National College of Technology）

THE HISTORICAL METHOD OF BATRICE POTTER'S SOCIO-ECONOMICS

Kimitoshi SATOH[1]

Abstract

I would like to show here the feature and significance of the method of Beatrice Webb`s note, "On the nature of the Economic Science ", Appendix of her *My Apprenticeship*, which is Part I of her autobiography and published in 1926. I have already introduced this article in my paper, "On Beatrice Potter Webb's "On the Nature of Economic Science" : Its Introduction and Translation ", which is in *Research Reports of the Nagaoka Technical College*, 44(1), 2008. And I would also like to examine the outline of her previous economic article, written in 1886, named latterly "The History of English Economics", which is the base of her note.

According to *My Apprenticeship* she criticized the classical political economy as not being realistic, and assumed to extend her research far beyond Market Economy toward Welfare Economy and other Economies of Society by her historical method which had been originated from her previous economic articles. Her historical method is assumed to have the antecedant of the theory of social evolution of Herbert Spencer in social science and the evolutinal theory of Charles Darwin in biology.

***Key Words**: Beatrice Potter Webb, My Appreticeship, " On the Nature of Economic Science", "The History of English Economics", historical method, the theory of social evolution, Herbert Spencer, Charles Darwin, Welfare Economy*

１．はじめに

筆者は以前，本校の紀要でビアトリス・ウェッブの1926年の*My Appreticeship*[1)]（以下『私の修行時代』）の付録の「経済科学の本性について」[2)]論文（以下，付録「本性」論文）を紹介した[3)]．（注1）そこでは，「本性」論文の紹介と翻訳が主であり，内容に立ち入った分析ができなかった．今回はまず，そこに示された彼女の歴史的方法の特徴を，社会学的経済学の方法と社会生理学／病理学的方法を確認したい．また，その元となったビアトリス・ポッター時代の1886年の「イギリス経済学の歴史」論文の草稿[4)]（以下1886年論文草稿）とその作成過程についても把握したい．さらに，ビアトリスの社会生理学／病理学的方法の進化論的側面について，彼女の進化する社会組織としての社会把握を評価したい．これらのことが本稿の課題である．

＊

ビアトリスは『私の修行時代』の本文で付録論文を解説しており，そこではリカードからの古典派政治経済学の抽象的演繹的方法批判して，歴史的方法を提起している．この「歴史的」という言葉は，ビアトリスは，「進化的，発生的，動的，比較的方法」とする代わりに使用していると注記している[1]．また，これはハーバート・スペンサーの社会有機体説の生物学的方法を，歴史的方法で批判的して，病理学的に受け継ぐ方法といえるのである．さらにそれは，その後彼女が数年後にシドニー・ウェッブと結婚して，1897年に共著で出版した『産業民主制論』[5]において，スペンサーのレッセフェールの個人主義から，政府干渉や他のアソシエーションによるソーシャリズムとしてのコレクティヴィズムに，主体を変えて受け継ついだ社会進化論となったのである．そこでは，企業などが環境へ機能的に適応して効率化してゆく適者選択，及び，逆の不適者淘汰の進化過程がおこるとして，チャールズ・ダーウィンの生物学的進化論に通じる論理が適用されている．

ただし，ビアトリス・ポッターの1886年草稿の精確な把握と位置づけのためには，日本人には読みづらい手書き文書の清書と確認が必要で，また，日記や手紙に立ち入って検討し，研究者の見解などを詳しく検討しなければならないのであるが，それは次稿の課題とすることをお許し願いたい．

＊＊

さて，A.M.McBriar は*Fabian Socialism and English Poitics 1884-1918*でビアトリス・ポッターの見解の「歴史的方法」の先駆性とフェビアン協会の見解への影響について以下のように述べて，1886年草稿の方法的先駆性を強調している．

「フェビアンの見解の変化は単に歴史を研究した結果ではなかった．それは，経済学者がそれまでに彼らの抽象的演繹モデルのタームで論じてきた諸問題に，歴史的方法を特別に用いたことの帰結であった．フェビアンの中でもこの方法の先駆者はビアトリス・ウェッブであった．

すでに1886年と1887年に，フェビアン協会のリーダーたちの誰にも出会わないうちに，（当時の名がそうであった）ビアトリス・ポッターは経済学を研究してきて，権威ある経済学者たちの抽象的かつ演繹的方法に次第に大きくなる不満を募らせてきていた．」[6]

また，『女性経済学者群像』で8人の女性経済学者の一人としてビアトリスを取り上げた，トムソンとポーキングホーンは以下のように述べて，ビアトリスの社会学的経済学の福祉国家論への貢献を強調している．

「資本主義的個人主義者と革命的社会主義者は対立の一途をたどり，あからさまな闘争はもはや避けられないように思われた．しかしながら十九世紀後半の英国には，無意味な衝突を避けるために，両派の妥協がなされるべきだと認識した知識人グループがいた．ビアトリス・ウェッブはその重要なメンバーであった．彼らは両派にとっての最善の原理となるような哲学を喧伝しようとしていた．こうした理論的総合を成し遂げるに当たって，ビアトリス・ウエッブが果たした社会貢献への役割は決して小さなものではない．」[7]

ビアトリス・ウェッブは，社会調査家や社会改革家としては高名であるけれども，経済学者としてはあまり良く知られていない．しかしながら，以上のマクブライヤーや，トムソンとポーキングホーンの言うように，一部で高く評価される若きビアトリス・ポッターの社会学的経済学とその歴史的方法の把握，及び，その後の展開がイギリスの福祉国家論や福祉経済学の形成においてどのように貢献しているかは，本稿や前稿に共通した筆者の研究の一貫した大きなテーマである．本稿では，1886年の彼女の研究における，そうした方向性を確認しておきたい．次節で，まず，ビアトリスの研究方法の思想的背景をなす彼女の自立までの遍歴と交友状況を概観する．

２．ビアトリスの自立と経済学研究

イギリスの社会調査の専門家として，社会改革家として，社会経済学者として，シドニー・ウェッブ夫人としても有名な，ビアトリス・ポッターは1858年1月22日グロスターシャーのグロスターにおいて，富裕な資産家で鉄道投資家のリチャード・ポッターの家庭に，８番目の娘として生まれた．なくなったのは1943年4月30日リフック（Liphook）である．シドニー・ウェッブとの結婚後はビアトリス・ポッター・ウェッブである．彼女は，結婚後ミセス・ウェッブと呼ばれて，＜ああ結婚して姓も名も失ってしまった＞と，冗談まじりに嘆いた．ビアトリスは結婚前後の時期では，女性参政権には同調しなかったが，男勝りの男女同権意識や、「家庭の天使」となることを拒否するフェミニズムの感覚はあったといえる．

ビアトリスは小さい頃は病弱で，少女時代から社会貢献と自己の生理的・生活的欲求という二つの心

の分裂に悩んでいた．いわば社会貢献と生理的・生活的欲求とを分つ塀の上を，どちらかに落ち込まぬように危うい均衡を保って歩むような，緊張の解けない心理状態であったのであろう．社会貢献と欲求との対立は，天職を自覚して社会的に自立するまでの「修業時代」のライトモチーフと言える．それは能力と欲望として一般化してとらえられ，それらの結合及びその制度的・体制的表現としての労働組合と消費組合の結合・結婚という形で，今回紹介する，1926年に出版された自伝第一部に当たる『私の修行時代』の付録の「経済科学の本性について」論文の重要な観点となったと言うことができる．

ビアトリスは，少女の時から当時の有力な哲学者ハーバード・スペンサーの親身の教えを受け，父親の配慮で19歳のときから彼に師事して社会哲学（レッセフェールによる個人・社会進化）を学んだ．彼女は父の投資管理の仕事の補佐と家族の世話に忙殺されながらも，社会問題の実地調査に励んだ．彼女は，農夫の娘と偽って労働者階級の実生活の経験をするなど，現実社会を実践的体験的に研究することもしたのである．

自由党の指導的で急進的な政治家，都市改革の旗手でバーミンガムの市長も勤めたジョセフ・チェンバレンと出会い，ビアトリスは激しい恋愛感情を抱いた．しかし，当時の中産階級の常識に則った，チェンバレンからの家庭に入る要請をビアトリスが拒絶することから，この恋は失恋に終わってしまった．それはキャロル・セイモア-ジョーンズが指摘するように，当時の資本主義的家父長制的なイデオロギーにもとづく「家庭の天使」となることをビアトリスが拒絶したことでもある．その一方で，ビアトリスはロンドンで，後にナショナルトラスト運動も提唱したオクタビア・ヒルらの慈善組織協会COSに参加し，慈善的住居援助計画の仕事に携わり，貧困の救済について多くのことを，特に慈善では貧困をなくすことができないことを学んだ．そこでの経験をもとに貧窮者の生活について *Pall Mall Gazette*（以下『ペル・メル・ガゼット』誌）に論文 “a Lady’s view on the unemployed”を投稿し，掲載された．それは初めて公刊された論文であり，ビアトリスが社会的に認められたことが，彼女がチェンバレンに失恋したことからの回復の契機となったのである．その後も経済学の研究を続けて，「本性」論文の元になった1886年論文を書いたのである．この『ペル・メル・ガゼット』誌に投稿した論文が，従姉妹のメリーの夫で当時社会調査家として著名なチャールズ・ブースから注目された．チェンバレンとの交際においての議論では，政治経済学や政策知識の不足を自覚していたが，ビアトリスはブースと親しく話すことで，彼の深い学識と研究方法を知り，自分の社会科学的な知識の限界を認識した．

アッパーミドルクラスの大金持ちの資本家の娘に生まれたビアトリスが，自由党の指導者の内助の妻とならず，労働党を指導したフェビアン協会の指導者のパートナーとなったことは，20世紀初頭のイギリスにおけるミドルクラスのラジカリズムと労働者階級の結合をしめす象徴的なものである．彼女は，ミドルクラスのラジカリズムをもって，パートナーとなったシドニー・ウェッブとともに，労働組合と渡り合いながら，フェビアン協会を，また後の労働党を指導していったのである．図式的に言えば，ビアトリスの軌跡は Lib(eral)/Lab(our) 労働運動指導者の自由主義者との共闘路線でなく， Libから出てLabに至る道である．

チェンバレンとの関係の破局のあと実家の女主人として病気の父の面倒を見ていたけれども，1886年から1887年にかけて，さすがにビアトリスは意気消沈していた．その時期は彼女の経歴の支点／転換点Death Point of My Careerであったが，技芸Craftを獲得しての「貧窮者の生活を研究して貧困の原因を追及すること」という信念の自覚ないし「信仰告白」Creedにより，自分の天職 my vocationを発見して低迷した意識の状態から回復したのである．

＊

ビアトリスはこの時期に社会科学を勉強して，1886年にイギリス経済学説史についての，1887年にはマルクスの『資本論』第１巻（エンゲルス編の英語版）の価値論についての批判の二本の経済学論文の草稿を書いた．これらは残念ながら，ビアトリスの悪筆や完成度の問題などの諸事情で出版されなかったが，1926年の『私の修行時代』の付録の「経済科学の本性について」論文として，二つをまとめて加筆されて収録された．それによる限りでは，経済学研究史上で初めて，家族生活の労働領域や福祉経済領域，その他の社会経済領域を設定し，そこへ歴史的方法，社会有機体的方法，社会制度的方法と生物学的方法を適用するという，領域と方法との新たな結合と展開のアイディアを示したと評価できるもので，1886 -7年時点でそうであれば，経済学説史上で画期的かつ先駆的といえるものなのである．

ビアトリスは経済学の勉強を開始して会得した「私自身の小さなこと」を上の二つの論文で表現したが，それは，ブルジョアアッパーミドルクラスの所有する大企業を中心とするリカードの演繹的抽象

的理論経済学だけでは貧困を把握することもなくすこともできないという確信であった．そうしたことからの，社会救済の信念と社会調査の「歴史的方法」の技芸creed and craftを獲得して自分の進むべき仕事を自覚したのである．これは，現実に対する経験的な対応，貧困問題解決のための社会調査と研究であり，社会調査による貧困問題の状態の把握という知的欲求の充足と，貧困問題の解決というブルジョア階級における慈善／贖罪意識とラジカリズムによる社会貢献との，一貫した結合と見ることができる．こうして，ビアトリスは，貧困問題の調査と対策の仕事の道を自覚して，天職とすることによって，この時期の「二つの心」の調和を見いだし，「修行時代」を終えたのである．

＊＊

その後ビアトリスは社会問題，貧困問題についての調査論文を書き雑誌や調査報告書に掲載された．そうして1890年頃までには，ビアトリスは自立した調査の専門家として認められて社会調査研究家としての地位を確立して，自分の職業生活を開始したのである．ただし，この職業からの収入はビアトリスが暮らしてゆくには十分なものではなかったと推測される．彼女の結婚後の実家の資産からの生涯の年金収入は，労働者が20ポンドで1年間裕福に暮らして行けた時代で，1000ポンドというたいそう贅沢な水準である．ウェッブ夫妻はこの収入を，単なる消費に費やすのではなく，彼らの社会貢献として，社会改革のための調査や政治活動に支出したのである．

社会調査や研究活動において社会問題と貧困問題の研究会で，　ビアトリスはシドニー・ウェッブと出会い，シドニーの論文や才能を高く評価しながらも紆余曲折をへて，「家庭の天使」としてでなく，二冊目の自伝のタイトル *Our Partnership* [8]の示すように対等なパートナーとして，1892年に結婚した．バーナード・ショウらとともにフェビアン協会の理論的指導者となった二人のウェッブは，生活賃金説を打ち建て，ナショナルミニマムの概念という福祉国家観の基礎を確立して政策や制度を立案し，そうした国家社会の実現のための理論的普及活動の先導的主体としてのフェビアン協会を導いた．浸透戦術で議会に影響を与えようとした後，活発な調査・研究・著作・政治活動を行なって，イギリスの労働党の結成や活動，および，社会民主主義運動に大きな影響を与えたのである．二人は個人的にも次の世代の教育にあたり，1895年にロンドン・スクール・オブ・エコノミクス・アンド・ポリティカル・サイエンス（ロンドン政治経済学院 ： LSE）を創設して，現在のロンドン大学経済学部に育て上げ，そこからも，労働者教育ばかりでなく，社会福祉学および福祉行政学の分野で，福祉国家を担う人材養成に大きな成果を上げたのである．

３．1926年の『私の修行時代』の付録論文と1886年の論文草稿について

ビアトリス・ポッター・ウェッブは，先に述べたように，1926年に出版した自伝の第1巻にあたる『私の修業時代』の本文で，で1886年と1887年の２本の草稿[4)9)]の執筆と，そのための経済学研究について解説している．そして，巻末に付録としてこれら二つの論文をまとめて新たな論点を付け加えた「本性」論文を収録したのである．以下の本文の解説を見て二つの論文の執筆状況を把握しよう。

「すぐに公表することを意図した，社会診断についてのエッセイは書かれずに終わった．私たちのMonmouthshire の家であるArgoed で私の父と姉妹とともに過ごした，1886年の夏の月の間に，私は，アダム・スミスからカール・マルクス，カール・マルクスからアルフレッド・マーシャルという，政治経済学者達の著述の研究から生じる一連の思考を，経済学の社会学との関係についての観念を，首尾一貫した価値論を，発展させる方向に転じた．・・・
1886年の夏と秋の間ずっと私が夢中になっていた『私自身の小さなこと』は，二つの長いエッセイの形をとった．一つは『イギリス経済学の歴史』についてのものであり，他の一つは『カール・マルクスの経済理論』についてのものである―どちらも今まで公表されたことはなかった．これらのエッセイの中に何か本質的な独創性がある，とは私は思わない．むしろ当然にも，その真理の粒は認められた政治経済学者の本に見られるようなものである一方で，その全ての誤りは他の変わり者の著作の中に見いだされるものであるのだ．私が言いたいことはせいぜい，これらのエッセイに体現されたアイディアは事実私自身の心から生じたということだ．」[1)]

ビアトリスは，後で示す彼女の日記に見るように，最初はJ.S.ミル，フォーセット，スミス，リカード，ジェヴォンズやマーシャルの経済学を，のちにマルクスの著作を勉強して，「政治経済学者達の著述の研究から生じる一連の思考」を研究していった．1886年に「経済学の社会学との関係についての観念を」発展させて，リカードの抽象的演繹的方法の批

判をテーマとした「イギリス経済学の歴史」という草稿を書き，1887年に「首尾一貫した価値論」を目指してマルクスの『資本論』冒頭の価値論を批判する草稿を書いた．彼女は『私の修業時代』のなかでそれらの論文について「私自身の小さなこと」が形をとったものと解説している．そして２本の論文の草稿をまとめて，いくつかの論点を追加した論文である「経済科学の本性について」を自伝の付録としてつけたのである．ビアトリスは「これらのエッセイの中に何か本質的な独創性がある，とは私は思わない」と謙遜しているが，実際には，1926年までに書かれた付録論文では，彼女の社会学的経済学の方法と対象について鋭い指摘がみられる．筆者はこの付録の「本性」論文と元の1886年草稿が「本質的な独創性」のあるものと考えて，2008年３月に「本性」論文の紹介と翻訳を発表したのである[3]．熟年のビアトリスの歴史的方法の把握のために，その翻訳した「本性」論文を以下の節で分析してゆく．

ビアトリスの社会学的経済学の「本質的な独創性」を把握してゆくためには，まず，「本性」論文における彼女の社会学的経済学の方法，対象，特徴を把握しなければならない．また，ビアトリスの社会学的経済学の「本質的な独創性」の推移を明らかにするには，この「独創性」の時期的な発展の検討が必要である．それには，付録論文や当時の手紙や日記の検討は当然として，40年前に執筆された1886年と1887年の手書き草稿[4)9)]の清書を行って，1886-1887年当時の彼女によるスミス，リカード，マルクスの位置付けや，社会学的経済学の方法，対象，特徴を把握しなければならない．そして，それを付録の「本性」論文と比較し発展関係を把握しなければならないが，これは次稿以降の課題である．

４．日記に見る1886年- 1887年のビアトリスの執筆状況

本節では，前節で見た，『私の修行時代』に書かれた二つの論文草稿作成のいきさつを，ビアトリスが生涯にわたって書き続けた日記によって確認する．個人の理論形成の事実確認に関心のない方は，本節を省略して，次節に進んでいただきたい．以下B.W., Diary, Vol.1で Webb,B.:The Diary of Beatrice Webb,Volume one 1873-1892,1982 [10]を示す．

＊

編者のノーマンとジーンのマッケンジーは，1886年1月―1887年12月当時のビアトリスについて，ビアトリスの『日記』第一巻の第三部「自分の経歴の死点1886年1月―1887年12月」冒頭での第三部への序文で，ジョセフ・チェンバレンに失恋して，うちひしがれた状態のビアトリスが，そこから経済学を学んで何をつかんだかを次のように書いている．

「ビアトリスがこの時期を『自分の経歴の死点』と考えた理由は，そして1886年の彼女の日記が，かくも失意のうちに殴り書きの遺書で始まる理由はわかり易い．「『私が指示してきた狂気の様でまた雑多な生活から，このように強制的に引き上げざるを得なかったことは，全体としては，儲けものであった．』ということも，また，それから40年後に『私の修行時代』を書くにいたった時自覚していたように，明らかである．彼女は自分の職業を発見したのである．つまり，貧窮者の生活を研究して貧困の原因を追及することである．そのとき彼女に必要なのは経済理論，産業史，憲政の法の講義だったのであり，そして・・・仕事の機会を与えたのであった．」 (B.W.,Diary, Vol.1：p.152)

結局，社会問題の追究の結果「彼女は自分の職業を発見したのである．つまり，貧窮者の生活を研究して貧困の原因を追及することである．そのとき彼女に必要なのは経済理論，産業史，憲政の法の講義だった」．こうして，失恋と父の看病への失意のうちにビアトリスの経済学の研究が続いた．

「自分自身の小さな事」を悪筆の手書き草稿に表現しながら，輪番で父の面倒を見ることにするという姉妹の配慮で「1886年の晩秋に，・・・彼女はイーストエンドでのチャールズ・ブースの仕事に加わることができたのである．1887年末までに，ビアトリスが *Nineteenth Century* 誌に『イーストエンドのドックライフ』についての自分の調査を発表した後で，彼女の精神は再生し始めていた．」つまり，彼女は社会調査の仕事をし，調査報告を書いていきながら，チェンバレンへの気持ちの整理をつけ「結婚生活であろうと永遠の独身生活であろうといずれも，覆水盆に帰らず，です」と書いたのである．

「そのときはかくして，ロンドンへの短期の訪問中だけ中断する，隠棲の時期であった．しかし1886年の晩秋に，彼女は自らを救い出すため姉妹たちと輪番で父親の世話することにした．それで彼女はイーストエンドでのチャールズ・ブースの仕事に加わることができたのである．1887年末までに，ビアトリスがNineteenth Century誌に『イーストエンドのドックライフ』についての自分の調査を発表した後で，彼女の精神は再生し始めていた．彼

女は Mary Playne（三番目の姉：著者）に次のように書き送った．『私がそれに対して凄まじく困惑したとはいえ，私は，仕事を退いた一種の満足感を見いだして，快適な種類の無為でいることを意図するでしょう．結婚生活であろうと永遠の独身生活であろうといずれも，覆水盆に帰らず，です．』」（B.W.,Diary, Vol.1：p.152）

＊＊

ビアトリスの1886年論文執筆時の状況に戻ろう．1886年7月2日，[The Argoed]　ビアトリスは政治経済学についてこう記している．

「ああ，私の頭は痛み，私の野心的アイディアは手の届かないほど大きく遠くにぼんやりと現れる．
政治経済学は嫌なものだ―もっとも嫌な骨折り仕事だ．でも，明らかなことは，私がそれに習熟しなければならないこと，そして更に，私がその基礎に習熟しなければならないことである―すなわち，[理論の]新たな展開はいずれも，現代の産業生活の主要な特徴についての幾つかの無意識的な観察と一致するからである．現在私が欲する形態は，大量の演繹的推論と例証的事実とからは想像もつかぬものである．私は，政治経済学の基礎となっているデータが実は何か，それが必要とする仮定は何か，その推論と結論が覆う領域は何か，を理解する必要がある．」（B.W.,Diary, Vol.1： p.173）

ビアトリスは，古典派政治経済学批判のために「政治経済学の基礎となっているデータが実は何か，それが必要とする仮定は何か，その」「大量の演繹的推論」と「結論が覆う領域は何か，を理解する必要がある」としている．また，「現在私が欲する形態は，大量の演繹的推論と例証的事実とからは想像もつかぬものである．私は，政治経済学の基礎となっているデータが実は何か，それが必要とする仮定は何か，その推論と結論が覆う領域は何か，を理解する必要がある」と彼女は執筆時の問題意識を示している．

1886年7月11日，[The Argoed]の日記が書かれた場所に，ビアトリスはアダム・スミスの『国富論』（1776）についてのノートを挿んでいる．(BW, Diary Vol.1 ：p.174)この時期に『国富論』を読みこなし，スミスの社会改革面を位置付けたのであろう．その後決定的な展開が訪れる。

1886年7月18日，[The Argoed]
「私は，望む限りに，経済科学の背骨を叩き折ってしまった―その一つの段落を正しく書くためには，おそらくもう２週間の研究がいる．政治経済学の原理は，今まで確固たるものとなったことがなかった―その原理は，新たな問題が観察されるにつれ，その数が増えてきたばかりか，それらの原理自体は，すでに一般化されてきた各部門の主題についての観察により大なる注意を払って発展してきたのである．・・・
日曜で私は疲れている．私は自分の心の中で成長しているアイディアが真のものであると考える・・・．私は J.S.Millの『論理学』を読み終えたし，Fawcettの政治経済学を身につけたし， A.Smith， Ricardo， Jevons， Marshall の方法と目的と仮定を持っている―Laveley の『原始的財産』と Rae の『現代の社会主義』を詳しく吟味した・・・．」（B.W.,Diary, Vol.1： p.174）（注2）

このように1886年7月18日ビアトリスは，「私は，望む限りに，経済科学の背骨を叩き折ってしまった・・・政治経済学の原理は，今まで確固たるものとなったことがなかった―その原理は，新たな問題が観察されるにつれ，その数が増えてきたばかりか，それらの原理自体は，すでに一般化されてきた各部門の主題についての観察により大なる注意を払って発展してきたのである」と言って，「政治経済学の原理」を批判しきったと確信するのであった．

それから3週間ほどして，8月8日にはビアトリスは「イギリス経済学の歴史」の草稿（1886年草稿，引用では「イギリス経済学の進歩」と表記）を書き上げた．

1886年8月8日，[The Argoed]
「私は自分のエッセー『イギリス経済学の進歩』の第一部を仕上げ，今，一息入れるつもりだ．この第一部は，この科学の起源と，アダム・スミスにおける科学的探求者と社会改革者という二重性としてのその表現とを扱っている．第二部は次のような問題で始まる予定である．少数による階級的圧政と抑圧とに対する１８世紀のこの熱烈な改革運動が，如何にして，１９世紀の雇用者の福音を代表する一科学に転化されたのか，と．」（B.W.,Diary, Vol.1： p.174）

ビアトリスは，次のように「「『イギリス経済学の進歩』の第一部を仕上げ」たあと，それと第二部のテーマを示している．「この第一部は，この科学の起源と，アダム・スミスにおける科学的探求者と社会改革者という二重性としてのその表現とを扱っている．」そして，「第二部」は次のような問題で始まる予定である．「少数による階級的圧政と抑圧

とに対する１８世紀のこの熱烈な改革運動が，如何にして，１９世紀の雇用者の福音を代表する一科学に転化されたのか」と言う問題である．

８月の「イギリス経済学の進歩」という，発展段階論的タイトルは，９月になって「イギリス経済学の生成と成長」となった．進歩論から生成／成長論と生理学的になったのである．経済学の変化をラマルク的な進歩主義からダーウィン的な生成進化主義の方向に展開したとも取れる．この1886年草稿については本稿では当初から，『私の修行時代』によって「イギリス経済学の歴史」と呼んでいる．

「イギリス経済学の歴史」論文の公表について，ブースを始めとして，積極的な賛成が得られなかったビアトリスは，「私のアイディアは真のものと，またいつの日か，私によってでなければそのときは私よりもずっと適任の他の人々によって，仕上げられるであろうと考える．私の論文の歴史的部分はできが良くて重要な部分であり，そして私にとって全体での失敗は歴史的で重要な部分と構成との結び付きのぎこちなさである，と私は考える」という．彼女は「小さなもの」の「アイディアは真のもの」と確信しつつも，「歴史」論文の「歴史的部分はできが良くて重要な部分」だが，「全体での失敗は歴史的で重要な部分と構成との結び付きのぎこちなさである」と反省している．

1886 年 9 月 18 日[The Argoed]
「　・・・私のアイディアは真のものと，またいつの日か，私によってでなければそのときは私よりもずっと適任の他の人々によって，仕上げられるであろうと考える．私の論文の歴史的部分はできが良くて重要な部分であり，そして私にとって全体での失敗は歴史的で重要な部分と構成との結び付きのぎこちなさである，と私は考える．さようなら，小さなもの．もし君が私の元に校正刷りで帰ってくるならば，私は君を成功した子供として歓迎しよう．もし君が拒絶されて帰ってくれば―よろしい，君よりも優れた多くのものが同じ憂き目にあってきたのだ．私の白昼夢は壊されるであろう，しかしおそらく私自身にはかえってよいであろう．」（B.W.,Diary, Vol.1：p.176）

＊＊＊

12 月末にはビアトリスは，気を取り直して，社会科学と経済学の対象ないし領域について「概略」をする．

「経済科学の適切な主題が人間の本質であることの論証」，つまり，「社会科学が」「結びついている人間」の「社会生活の中で生み出される身体的な諸力―能力と欲望」を扱うのであるから，「経済学は，何らかの特別な結合力を扱いつつ，この科学の一部門でなければならない」のである．したがって，「経済学が交換価値を持つ能力と欲望とを伴うのを，示さなければならない」のである．この観点は，後々展開されるビアトリスの理論展開のモチーフとなる重要な社会学的経済学，ないし社会経済学の方法の提起である．

1886 年 12 月 20 日、[kildare]「さあ仕事をしよう。私は自分の論文を読み直す前に、それを概略してみたい。それは、経済科学の適切な主題が人間の本質であることの論証で始まる。社会科学が『結びついている人間』の科学であって、経済学は、何らかの特別な結合力を扱いつつ、この科学の一部門でなければならないのである。それから、社会生活の中で生み出される身体的な諸力―能力と欲望―の概略。私は、どのようにして、社会科学が人間の全ての能力と欲望を含むのかを、つまり宗教の歴史が宗教的能力と欲望とを伴うのを、経済学が交換価値を持つ能力と欲望とを伴うのを、示さなければならない。」（B.W.,Diary, Vol.1：p.191-192）

次にビアトリスは、「アナロジーに生理学を用いて」「経済学者たち・・・がどのようにして彼らの科学の主題を富と定義してきたかを示」す．つまり、「その歴史的起源を重商主義理論の中にたどらなければならない―その後に続く、アダム・スミスにおける真実の光の爆発、リカードにおける虚偽の結晶化、そして、正統派経済学者達の想定する人間、カール・マルクスにおける抽象的人間とその来るべき運命、現代の経済学者たちによるその人間の復権という奇妙な存在の発展を伴」って、「経済学者たち（が）・・・彼らの科学の主題を富と定義してきたかを示」すのであり，生理学的方法によるのである．

「それから私は、経済学者たちに目を転じて、彼らがどのようにして彼らの科学の主題を富と定義してきたかを示さなければならず、そしてまた私はアナロジーに生理学を用いてそのばからしさを示さなければならないのである。私はその歴史的起源を重商主義理論の中にたどらなければならない―その後に続く、アダム・スミスにおける真実の光の爆発、リカードにおける虚偽の結晶化、そして、正統派経済学者達の想定する人間、カール・マルクスにおける抽象的人間とその来るべき運命、現代の経済学者たちによるその人間の復権という奇妙な存在の

発展を伴って。」（B.W.,Diary, Vol.1： p.191-192）

ビアトリスは「アナロジーに生理学を用いて」として，生理学的方法を提起し，終わりのほうで，自分の理論の課題を提示する．「私自身の理論・・・の実際的な有用さを証明しなければならない。」つまり，「経済問題をその言葉で述べて、その意味を定義しなければならない」，「経済的な病理の注意深い観察の重要性を示しなさい。その例証として1834 年の青書[Blue Book 英国の国会または政府の報告書]を、また、全ての工場法を使いなさい。」また，「自由放任と国家援助の問題を述べなさい。一方でのこの生産と他方での窮乏との謎を自分でやってみなさい」と言う．それは，「経済問題」，つまり，社会の「経済的な病理」が「自由放任」によりもたらされ，その治療のためには「国家援助」が必要であるという観点に立って，自分の生理学的理論を提起することを，示すものである．

＊＊＊＊

大前眞氏も，研究領域についての能力と欲望の関係の観点を重視して，「ビアトリス・ポッター（ウェッブ）と政治経済学」論文[11]で，1886年草稿におけるビアトリスのリカードに対する批判を以下のようにいう．つまり，大前氏は，リカードの政治経済学について彼女はそれが実業の科学 Science of Businessとなっているとし，その「定常状態」の議論が「一定の人口が与えられれば，経済的能力Economic Facultyと経済的欲望Economic Desireは，質的にも量的にも固定される」という前提によるものであるとして批判的に扱っていると言うのである．

本稿でも，彼女の研究・調査の領域について，能力と欲望の関係の基礎性の観点の展開を追いたい．

５．リカードら古典派政治経済学者の抽象的演繹的方法批判と社会学的歴史的方法の提起

a. 古典派政治経済学批判の要諦

1886年と1887年の草稿を元にした，以下の付録の「経済科学の本性について」論文における，リカードを始めとする古典派経済学批判と社会学的および生物学的経済学の方法の提起は，もし1880年代に主張されていれば，おそらく経済学研究史上初めて，家族の生活領域，福祉経済領域及びその他の社会経済領域を経済学の対象として提起し，そこへの歴史的方法と生理学的方法を適用するというアイディアを示したと評価できるものである．しかし，この「経済科学の本性について」は，1926年までの時期に上の二本の草稿をまとめて，その後彼女が獲得した新たな論点を付け加えたものである．従って，上のように方法と領域の結合の時期と先駆性を主張するためには，1886年草稿の検討が必要であるが，ここでは，「本性」論文の特徴の確認に限っている．

ビアトリスのアイディアと経済科学批判を示す要諦は， 以下の「本性」論文の翻訳文における①～⑪である．この白丸数字の番号と次のbの番号とが対応している．（丸数字は論じられた順序を示す）

①政治経済学のように， 生産と消費を一緒にし，社会進化の段階を一緒にし， 様々な社会組織を一緒にすることには利点がなく， 人間行動の研究，社会制度の研究， 社会学が必要である．
② 政治経済学は混乱状態から通商の原理を分離して単純化している．
③政治経済学は大企業だけが富を生産する唯一の形態ではないことを無視する．
④富の生産は多くの社会制度によって行われることを政治経済学はあつかわない．
⑤政治経済学も経済学も経済科学は領域と推論方法を誤っている．
⑥ビジネス組織と他の社会組織の併存状況が分析対象である．
⑦経済科学の抽象的・演繹的方法は弊害をもたらす．
⑧社会制度の維持には他の社会制度の補完が必要である．
⑨economic という言葉を生活の経済学と貨幣の経済学にとっておける．
⑩制度主義と社会制度の生成発展没落論を提起する．
⑪使用していない経済的能力は急激に劣化して一時停止状態となる―そして効率的な経済的欲望は，生産の義務がなくて満足させられると，急速に寄生的になる―これは私が，リカードとマーシャルとの抽象的な経済学からは到達しえなかった結論なのである．これは「社会的病弊」である．

b.ビアトリスの古典派政治経済学批判

上の付録論文のうちに見た要諦について，ビアトリスの古典派政治経済学批判を詳しく見よう．（ページ表記は，『私の修行時代』のページと佐藤[2] の「紹介と翻訳」のページを示す．）

①「正統的ないしリカード派経済学」は，「富の生産と消費に関する全ての活動をまとめて一緒に集め」，「政治経済学と呼ばれる一つの自足的科学の主題となす」ことで「一般的な富の生産の科学をな

すという，暗黙の主張」がある．これは「すでに対抗する権威から攻撃されている．」これに対して，「私はほとんど利点をみず，多くの不都合な点を見いだすのである」．（p.422：p.81）

ビアトリスの想定する，「不都合な点」がなく「利点」のある社会科学は，「富の生産と消費に関する全ての活動」，および，「社会進化の様々な段階」，「社会の機能を実行するさまざまな種類の社会組織」をきちんと区別する「社会における人間行動の研究，すなわち社会制度の研究，あるいは社会学」なのであるとして，次のｃで見るように，ビアトリスは社会学的経済学を提起してゆくのである．

②ウォルター・バジョットによると「政治経済学という科学は，大規模に生産的で通商的な社会におけるようなビジネスの科学と定義される」し，「イングランドを富裕にした『大通商』—の分析である．それは，上の通商を可能にする原理的事実を想定して，また，ある抽象科学の方法のように，これらの原理を分離して単純化する．つまり，実際にそれらの原理を混合している混乱状態からその原理を分離する」．つまり，政治経済学は「実際にそれらの原理を混合している混乱状態からその原理を分離」して「単純化する」のである．（p.422：pp.81-2）

③「リカードが考察していた19世紀型の「大企業」が，富の生産の唯一の形態ではない」し，「今日でさえも，利潤追求的な資本家的企業の他に，世界には他の社会制度が存在し，それは言葉のもっとも狭い意味においてさえも，少なからざる量の『富』を生産している」のである．「かくして，リカード派経済学は—もしその妥当性についてバジョットの正当化についての判断に権威があるならば—富の生産の科学を称する立場にない．」（p.422：p.82）

④リカード以来の「政治経済学は，研究され教えられる時，富の生産に取り組むまたは関わる多くの社会制度のうちの一つだけ扱っている」けれども，「他の社会制度を無視するのは誤りである．『ビッグビジネス』または利潤形成的な資本主義についてリカードは，彼の後継者たちが，過去一世紀に渡って，かくも精出して巧妙かつ精緻にしてきた，『法則』を定式化しようと求めたのである」．（p.423：p.82）

⑤の前半について．政治経済学は「愚か」にも，「政治的ということとコミュニティの産業組織と混同しているのである．経済学（Economics）という現代的な呼び方が取って代わったときでさえも，その「科学」は誤った内容の領域と不完全な推論方法とを引き継いでいる」のである．（ibid.：同上）

⑦について．「経済学ないし政治経済学と呼ばれるもの」の「定義ないし領域のこうした変化は，真理の発展に役立つ」し，また，「ほとんど必然的に，その推論の厳密な検証の可能性もなしに，リカードの権威がイギリス経済学の後継世代に押し付けていた，抽象的ないし純粋な演繹法の放棄を意味する」「抽象的かつ演繹的方法の多くの有害な結果の一つは，その演繹的推論の前提として使われている仮定，つまり金銭的自己利益が，事実上，現代の実業企業の基礎であり，その他の全てが単なる『摩擦』として無視される，という基礎的仮定であった」．「かくして，利潤形成者の全ての活動が，ただもっぱら金銭的自己利益によって引き起こされる，と考えられてしまうのである．これは，私の考えでは，彼らに対する不当な扱いである」（p.424：同上）．

c.ビアトリスの社会科学の方法の提起

古典派批判でも示されていたが，ビアトリス自身の社会科学ないし社会学の方法は次のようである．

①についてで見たように，ビアトリスの想定する，「不都合な点」がなく「利点」のある社会科学は，「富の生産と消費に関する全ての活動」，および，「社会進化の様々な段階」，「社会の機能を実行するさまざまな種類の社会組織」をきちんと区別する「社会における人間行動の研究，すなわち社会制度の研究，あるいは社会学」，つまり社会学的経済学なのである．

⑤の後半：研究の対象は「それに関わる男性と女性と帰属する動機がどんなものであろうとも，また，これらの制度が設立されたり維持される目的ないし目標と考えられるものがどんなものであろうとも，それらが実際に存在しているような，または存在してきたような，社会制度それ自体である」．「『ビッグビジネス』または利潤形成的な資本主義の組織は，現在において，最も重要な社会制度の一つである．そして，それはそれ自身の全体的研究に値するのであって，・・・この組織についての適切な叙述が見いだされなければならない」（p.423：p.82）

⑥「利潤形成的な資本主義ないし現代のビジネス組織についてのこうした研究は，他の社会組織についての個別研究とともになされるであろう．他の社会組織とは，家族，消費者組合，様々な種類の生産者の職業組織，地方政府，国家（ないし政治組織），国際関係，人間の知的／美的／宗教的関心，そしておそらく，社会学としてのみ扱うことのできる（そして何時の日か社会学に統合されるかもしれない）他の多くの諸部門である．」（ibid.：同上）

⑧「それぞれの型の組織（あるいは組織の不在），それぞれの社会制度，にはそれ特有の『社会的病弊』があり，もし進行が食い止められなければ—おそらく，他の補完的な社会制度の存在あるいは発展によって食い止められなければ—それは老衰ないし死に至る」（p.424：p.83）
⑨「政治経済学ないし経済学という分離された抽象的な科学の概念を我々が放棄すると考えると，そのとき『経済（学）的economic』という形容詞は，生活手段ないし生存手段から生じる人間の関係を定義するのにとっておけるであろう．あるいは—これらの関係が生じる社会制度がいかなるものであろうとも—貨幣のタームで測ることが，そして尺度ができるという，もう一つの方法で使用するためにとっておけるであろう．」（p.424-5：同上）
⑩「新たな分類方法の必然的な含意は次のようになろう．つまり，探求され，記述されそして分析されるべきことは，存在しているかまたは存在していた，社会制度それ自体であり，重力の法則になぞらえられるような，不変かつ普遍的で，事実との不一致が摩擦として捨て去られるような，なんらかの想定された『法則』，ではないのである．第二の系論は，以下のようである．つまり，これらの社会制度は，他の有機的構造と同様に，研究されなければならないが，それは想定された発展の完成形としてあるのではなくて，成長する社会組織の全ての変化の相にあるのである．即ち，胎児から死体まで，健康であったり異常であったりする，端的には，現実の社会関係の誕生，成長，病気そして死として，全ての変化の相にあるのである．そしてここでの病気の研究は最も興味のわく部分でさえありうるであろう．」（p.425：同上）つまり，生物学的研究方法の提起である．
⑪リカードもマーシャルも言わないことだが，ビアトリスによる調査結果から帰納すると，「使用していない経済的能力は急激に劣化して一時停止状態となる—そして効率的な経済的欲望は，生産の義務がなくて満足させられると，急速に寄生的になる」のである．（p.426：p.84）「社会的病弊」である．

以上で確認したビアトリスの研究方法について，トムソンとポーキングホーンは，「経済学の領域は社会病理学に関する研究を含」み，経済学は「社会における人間の行動様式や社会制度をすべて包括する研究の一分野とされる」という．ビアトリスの社会学的経済学の生物学的方法と，日常生活の領域へ開いてゆく視点が新しい経済学として評価される．

「ビアトリスは，経済学の領域は社会病理学に関する研究を含むと考えていた．そして経済学は，自己完結的で，自立した抽象的な主題を扱うとされるべきではなく，社会における人間の行動様式や社会制度をすべて包括する研究の一分野とされるべきだと結論した．」[7)]

６．ビアトリス・ポッターの社会学的方法と生理学的方法　　－結びに代えて－

前節で見たように，ビアトリスが経済学の対象を市場から人間・生活・社会へ開いてゆくことに対応する，社会学的経済学の生理学的方法の特徴は以下のようにまとめることができる．
a.「利点」のある社会科学は，「富の生産と消費に関する全ての活動」，および，「社会進化の様々な段階」，「社会の機能を実行するさまざまな種類の社会組織」をきちんと区別する「社会における人間行動の研究，すなわち社会制度の研究，あるいは社会学」，つまり社会進化的社会学的科学である．
b.研究の対象は「それに関わる男性と女性と帰属する動機がどんなものであろうとも，また，これらの制度が設立され維持される目的ないし目標と考えられるものがどんなものであろうとも，それらが実際に存在しているような，または存在してきたような，社会制度それ自体である」．すなわち，男性と女性の存在を意識した社会制度が研究対象である．
c.「成長する社会組織の全ての変化の相にあるのである．即ち，胎児から死体まで，健康であったり異常であったりする，端的には，現実の社会関係の誕生，成長，病気そして死として，全ての変化の相にある」という，成長・変化する社会組織を対象とする社会生理学ないし社会病理学の研究方法である．
d.社会制度にはそれ特有の「社会的病弊」があり，もし進行が食い止められなければ—おそらく，他の補完的な社会制度の存在あるいは発展によって食い止められなければ—それは老衰ないし死に至るのである．下位システムの混合の原理による，つまり，社会制度や個々の生産関係どおしが補完しあう社会システムを対象とする生理・病理学的研究である．
e.他の社会組織とは，家族，消費者組合，様々な種類の生産者の職業組織，地方政府，国家（ないし政治組織），国際関係，人間の知的／美的／宗教的関心，そしておそらく，社会学としてのみ扱うことのできる（そしていつの日か社会学に統合されるかもしれない）他の多くの諸部門である．
f.「経済（学）的economic」という形容詞は，生活

手段ないし生存手段から生じる人間の関係を定義する，つまり，研究対象は生活に開いて行くのである．こうした日常生活の経済学へ開いてゆく視点が新しい経済学の方向として，評価されている．

g.経済的能力と経済的欲望との関係の基礎性を重視．「経済的能力 Economic Faculty と経済的欲望 Economic Desire」の関係の社会的基礎的性格については，ビアトリスの1886年草稿と日記から明らかで，彼女は1886年から関心があり，後にこれらの関係の発展を主要なモチーフとして，社会学的経済学を展開したのである．

筆者としては，ビアトリスの上の方法的指摘は，進化する社会システムの研究方法の先駆的提起と評価したい．それは，進化の観点を有する社会生理学／病理学を含む生理学的方法である．また，それは経済学の領域を市場から外部に，人間・生活・社会へ開いてゆくものであり，両者が結びついて新たな経済学の方向をなすといえよう．ビアトリスの主張を次のように解釈したい．こうした新たな経済学の対象として，「誕生，成長，病気そして死として，全ての変化の相にある」，進化の様々な段階にある「社会の機能を実行するさまざまな種類の社会組織」や社会制度が，相互に補完しあっている．資本主義組織と「家族，消費者組合，様々な種類の生産者の職業組織，地方政府，国家（ないし政治組織），国際関係，人間の知的／美的／宗教的関心」が補完しあって社会と世界を成立させ，それぞれの組織や制度，および社会関係は，発生・成長の様々な段階にあるとしたい．ビアトリスの研究は進化の観点を有する社会生理学／病理学を含む社会生物学的理論なのである．

また，筆者個人の見解として，社会システムにおけるそれらの組織や制度，個別的生産関係は，個別の原理を有しており，一定時点で相互に結び合って社会的「均衡」編成（秩序）をなす．個々に環境に対して常時適応／不適応することで，進化・退化・生成・運動・発展・死滅しつつ，つながりの関係を組みなおして結果的に社会を変容／進化・退化させている（社会システム内在の価値を基準にして，良いか悪いかの判断は別として）ことも，強調したい．

謝辞：この研究は「１９世紀経済学におけるジェンダー意識」（課題番号19510280）研究の一環であり，平成２１年度科学研究費補助金の支援を受けたものである．

注：

注1） 佐藤[3)]の本文は以下のサイトからダウンロードできる．

http://ci.nii.ac.jp/Detail/detail.do?LOCALID=ART0008888194&lang=ja

注2） ビアトリスの読んだJevonsはジェヴォンズの『経済学の理論』で，1871年の第1版か1879年の第2版であろう．Marshall は、1886草稿では、ほぼ確実に、1885年のマーシャルのケンブリッジ大学就任講演 “The Present Position of Economics” であろう．マーシャル夫妻著の『産業経済学』の1879年の第1版か1881年の第2版も読んだかもしれない．

参考文献

1) Webb, B.: *My Apprenticrship*, Longmans, Green and Co., New York,1926.

2) Webb, B. : “On the Nature of Economic Science”, ((1) My Objections to a Self-contained, Separate, Abstract Political Economy and (2) A Theory of Value), in Webb, B. :*My Apprenticeship*, as Appendix D, pp.422-430, Longmans and Green Company, 1926.

3) 佐藤公俊：ビアトリス・ポッター・ウェッブ「経済科学の本性について」の紹介と翻訳，長岡工業高等専門学校　研究紀要，第44巻，第1号，平成20年3月，2008.

4) Webb, B.: “The History of English Economics”, PASSFIELD Collection, 7/1/3,1886.

5）ウェッブ，S.，ウェッブ，B.：産業民主制論，法政大学出版局，1969.

6）McBriar, A.M.: *Fabian Socialism and English Poitics 1884-1918*, Cambridge at The University Press, 1962.

7) ポーキングホーン,B.、トムソン,D.L.：女性経済学者群像，お茶の水書房,2008.

8) Webb, B.: *Our partnership*, Cambridge Univ. P., 1975.

9) Webb, B.: “The Economic Theory of Karl Marx”, PASSFIELD Collection, 7/1/5,1887.

10) Webb, B.: *The Diary of Beatrice Webb*, Volume one 1873-1892 , edited by Norman and Jeanne MacKenzie, 1982 , quoted as B.W., Diary, Vol.1.

11） 大前眞：ベアトリス・ポッター(ウェッブ)と政治経済学，經濟學論叢,45(3),55-69,同志社大学経済学会，1994.

（2009. 10. 5 受付）